

## ◎ 美術館情報

最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください

### 1. アサヒグループ大山山荘美術館【京都府乙訓郡】

(<https://www.asahigroup-oyamazaki.com/exhibition/kawai-hamada/>)

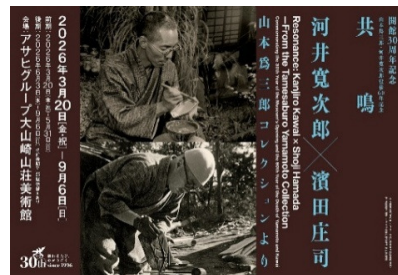
3月20日(金・祝)～9月6日(日)

開館30周年記念 山本爲三郎・河井寛次郎没後60年記念

共鳴 河井寛次郎×濱田庄司 — 山本爲三郎コレクションより

朝日麦酒株式会社(現アサヒグループホールディングス株式会社)初代社長・山本爲三郎(1893～1966)は、民藝運動をその初期から篤く支援していました。当館所蔵の山本爲三郎コレクションは、民藝運動の中心的人物であった河井寛次郎(1890～1966)と濱田庄司(1894～1978)

の作品が主要な部分をしています。東京高等工業学校(現東京科学大学)で出会い、京都市陶磁器試験場でともに研鑽を積んだ河井と濱田は、1926年、思想家・柳宗悦らと民藝運動を創始、その後も生涯を通じて深い親交を結びました。若き魂を共鳴させた二人の人生をたどりながら、それぞれの道を追求しつづけた両者の作品の魅力をご紹介します。

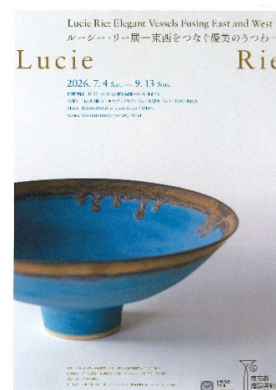


### 2. 東京都庭園美術館【東京・港】 (<https://www.teien-art-museum.ne.jp/exhibition/lucie-rie/>)

7月4日(土)～9月13日(日)

ルーシー・リー展 — 東西をつなぐ優美のうつわ—

20世紀を代表するイギリスの陶芸家、ルーシー・リー(1902～1995)。オーストリアのウィーンで生まれたルーシー・リーは、ウィーン工芸美術学校で轆轤(ろくろ)を用いた制作に魅了され、陶芸の道へと進みました。作家としての地位を確立しながらも、1938年に戦争で亡命を余儀なくされると、作陶の場をイギリスのロンドンへ移します。ろくろから生み出される優雅なフォルム、象嵌や掻き落とし技法による独創的な文様、そして釉薬によって生み出される豊かな色彩など、彼女の作品がもつ繊細さと凛とした佇まいは、多くの人々を魅了し続けています。国内では約10年ぶりの回顧展となる本展では、ウィーンで出会ったヨーゼフ・ホフマンや、ロンドン時代に知り合ったバーナード・リーチ、ハンス・コパーなど、リーと交流のあった作家たちの作品をあわせて展示し、日本を中心とした東洋のやきものとの関係性も見直します。制作初期から円熟期まで、リーが出会った場所、もの、人、時代背景を交えながら作品を紐解くことで、その造形の源泉や作品に表された信念に迫る展覧会です。



### 3. 岐阜県現代陶芸美術館【岐阜・多治見】 (<https://www.cpm-gifu.jp/museum/events/event/event-11230>)

7月11日(土)～9月27日(日)

特別展 吉田璋也のデザイン 新作民藝運動がめざした未来  
鳥取県出身の医師である吉田璋也(1898～1972)は、柳宗悦が提唱した民藝の思想に深く共鳴し、民藝運動に生涯を捧げた人物です。自身を「民藝のプロデューサー」と称した吉田

は、陶芸、木工、染織、金工など多岐にわたる分野で、地域の職人らと向き合いながら、現代の生活にふさわしい日用品を自ら指導・デザインしました。それらの生産、流通、販売、普及までを持続的な循環として確立し、また、鳥取砂丘など地元の自然や文化財保護活動に取り組むなど、広い視野と実験精神のもとに実践された吉田の活動は、民藝を通じた社会のデザインでもありました。本展では、吉田の新作民藝運動の思想と実践の軌跡を、吉田の蒐集品、吉田が手掛けた新作民藝の数々、そして関連資料などを通じて紹介します。

